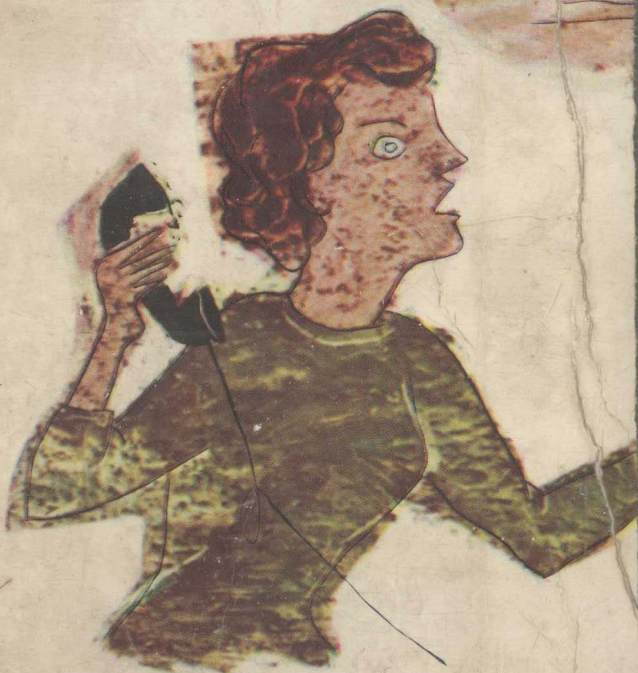


# ママ おうちが 燃えているの

松尾ちよ子 著



版 権  
所 有

ママおうちが燃えてるの、

¥ 240

1961年 5月15日 第1刷発行 ©  
6月30日 第3刷発行

著 者 松 尾 ち よ 子  
東京都港区青山南町6-118

発 行 者 奥 村 静 雄

発 行 所 株式会社 や し ま 書 房

東京都新宿区花園町65・三友ビル  
電 話 (351) 2548・振替東京 21846

印刷 株式会社上野印刷所・製本 日光製本KK 落丁・乱丁はお取替えします

# ママ おうちが 燃えているの

松尾 ちよ子 著



やしま書房



## じゃんけんぽん

「おい、お前、おれのポロシャツ着たんだろ。」

「うふっ！ いいじゃないの。貸してくれたってエー、お兄ちゃまこそ、あたしのマフラー持ってたんでしょ？ 返してよ。」

この騒ぎに、私も一枚加わることがある。

「ママでしょう？ あたしの洗いたてのブラウス着ていったの、やんなっちゃうなあー、せっかく昨日洗ったばかりなのに……。」

「何いつてるの、あなたこそママの大事なよそ行きのワンピース、着ていたりして……そうそう、ハイヒールのかかとを折ったのもあなたね。」

朝のわが家は、毎日大騒ぎ。お互にちよいちよい内緒で拝借しあうので、いつもひと悶着起こる。

二十三才の長男と、二十一才の長女は、ポロシャツやハンケチ、マフラーが問題の中心となる。私と長女では、洋服でもセーターでも何でも兼用、つまり満足に一人分ずつ作ったら破産

するから、共有財産というわけだ。そのお古が次女にまわっていく。長女の方が私よりずっと体格はいいが、いまの若い人は短か目に洋服を着るので、母娘兼用で十分間にあう。年のわりに、私がピンクや赤系統が着られるのも重宝だ。

「ママ、月謝今月は二月と三月の二ヶ月分だつてさ。それから生徒会費と、三年生の本代、えーと本代が千五十円、それに月謝二ヶ月で七百元……。」

「わかった、わかった。」

羽根が生えたように、お金は出ていく。終りまで聞くのが怖いようだ。

「ねえーママー、赤い皮のベルト、今日だけちょっと貸してくれない？ 絶対、大事に使うから……ねえーお願いよ。」

中学三年になるマコちゃんが、月謝袋をさし出すと、しゃれっ氣の出てきた淑子が、負けずにわりこんでくる。私はますます多忙をきわめ、頭は混乱をきたしはじめる。

「おいっ！ お前だろう。おれの靴下をはいて、こんなに泥んこにした奴は！ おまけにこんな隅っこに放りこみやがって……。」

泥んこの靴下を、出勤まぎわの長男に発見されて、怒られているのもご愛嬌だ。

みんなを送り出すと、私は急に空虚になる。幸い、私も仕事を持っているから、ひと休みし

てから出かけるわけだが、このまま家にいるのだったら、さぞ子供たちの帰るまでの半日を、もてあますことだろう。

大きくなったものだ。十年一昔というが、長男と長女の二人を、まがりなりにも一人前の社会人として巣立たせて、ほっと一息ついたところである。まだあと三人を育て上げなければ、私の務めは終らない。ひと休みする間もなく、つぎの階段を上っていかなければならないが、それにしても、たくましく成長した子供たちを眺めていると、苦しく悲しかった十年の月日が、夢のようによみがえってくる。

育ち盛りの六人の子供たちの胃袋は、親の苦労にはおかまいなく、膨脹していく。こうした不安な毎日の連続の中で、十年という歳月をどうにか過してこられたことを思うと、私は胸がいっぱいになる。断崖のふちを、よろめきながら辿りつづけてきた十年の姿を、鏡の中に見る思いで、私は静かに目を閉じる。

あいついで、私を襲った両親の死、夫との離婚、最愛の子供との死別。そして、数々のできごと――

私は一人娘だった。

戸籍面では次女で、英子という姉が一人あったが、父が満鉄時代、大連の病院で、一年未満

の人生を終えた。私とは五年の開きがあった。つまり私は、姉が死んで四年目に生まれたので、事実上は一人娘とかわりなかった。だから昭和十二年に結婚する時も、当時の法律では、養子縁組をするか、さもなければ形式的な裁判による、廢嫡結婚をしなければならなかった。私はそうして嫁いだのであった。

その夫も、戦争の惨酷な手から無事に戻ってはきたが、親子八人そろった楽しい生活も、わずか四、五年しか続かなかった。夫は間もなく私と子供たちを残して、一人去っていった。昭和二十六年のことだ。実家の両親はすでに他界していた。

私は天涯孤独となった。

もちろん、血をわけた六人の子供たちはいるが、当時九つをかしらに、七つ、五つ、四つに一才の双生児の合計六人の子供たちでは、とても相談相手になるどころではなかった。

「このまま、すうっと消えることができれば、楽だろうなあ……。」

真剣にそう思った日もあった。しかし六人の子供たちにとり囲まれている一日は、あまりにも短かった。一時間が、かけ足で通り過ぎて行く。新田の切り替えの苦しい中を、無我夢中で、子供たちを飢えさせないことに身も心もすりへらしていた。ピーピーさえずる六羽のひな鳥の声にけしかけられるように、考えるいとまもなく働いた。なりふりもかまっていられなかった。



寢床の中に、疲れ切った手足を横たえて、ほっとする間もなく、夜明けとともに、また一日が始まる。昨日のくり返しが、飽くこともなく続けられる。考えることも忘れて、私は循環線上を惰性でころがっていた。

夫は、自分の秘書である女性のもとへ走ったのである。その人は夫の従兄のお嫁さんだった人で、子供たちも、

「小母ちゃま。」

といて、親しくつきあっていた親類仲だった。

彼女もまた、戦争の犠牲者であった。ご主人の戦死で悲嘆にくれている彼女に対して、周囲のいたわりは、次第に薄らいでいった。ちょうど、そのころ、

「応召をうけた時、戦死していたら犬死にだったが、幸いこうして命を承らえることができたのだから、こんどは日本再建のための、礎となって尽くしたい。」

夫は純粋な気持で、政界にとびこんだ。私も双手をあげて感激した。だが一族は反対だった。地方財閥の息子が、よりによって、革新党から出馬しようというのだから、無理もない。

若くして未亡人になった彼女は、新しく人生をスタートするつもりで、夫の秘書になった。

「彼女が悲嘆にくれているので、少しでも気を紛らすために、秘書代りに手伝ってもらおう

と思つてゐる。彼女があまり死んだ夫のことを言うので、親類でも冷たいらしい。しかし我々のようにしあわせな結婚生活を送っている者には、愚痴もあたたかく聞いてやることができる。」

福岡から来た夫の便りに、私は大喜びで賛成した。

見ず知らずの他人より、どんなに私も心強かったことだろう。

だが、夫と、その秘書として新しい人生をスタートしようとした彼女との間に、次第に愛情らしいものが芽生えていったのだ。六人の子供に、もみくちゃになっている女房と、いつも身ぎれいにして、身のまわりの世話も十分行き届く未亡人。しかも、家族といっしょにいる生活より、秘書である彼女といっしょに、選挙区にいる生活の方が長かったことを考えると、どうにもならない成り行きのような気がしてくる。

夫は、二人の女をうまくあしらつていけるような人ではなかった。ある意味では、純粹な、気の小さい人だった。ただ、自分の心に忠実に生きようとするあまり、さまざまな波紋が、まわりの人々に及ぶことを、考えてみようとはしなかったようだ。

「自分の家庭も満足に治められない政治家が、家庭の集りである社会、そしてその社会の上になり立つ国家を治めようなんて……弱い女性や子供、それも一番身近な自分の妻や子供たちを不幸にしておいて、女性や子供の味方、働く者、弱い者の味方となつてたたかうもないもん

だわ。第一、いうこととすることが矛盾しているじゃないの。」

私は思った通りを卒直に手きびしく批判した。おなかで思っていることをかくすことができなかった。

世田谷に住んでいたころ、家に書斎があったが、夫は六人の子供たちが騒ぐので落ちつけないといった。名前は忘れたが、何とかいう女性のやっている小料理屋の一室で、毎晩終電車まで休んで帰って来た。

「八畳一間でも、親子がいっしょに暮らしている中からこそ、働く人や貧しい人への本当の理解ができてくるんじゃないかしら。生活の中から生み出したものでなければ、本物じゃないと思うけど。家が狭くて子供がうるさい、なんていつているようでは、本当に大衆の味方とはいえないでしょう？」

私もたしかに若かった。まとも過ぎたようだ。手心を加える術を知らなかった。もちろん夫操縦法など知る由もなかった。夫のさけたい点、いわれたくないところに刃をつきつけて、その痛みをえぐり出していたようだ。しかも苦言を呈するのは、もっとも身近な女房なればこそと思ひこんでいた。愛すればこそ言うのだと、一人ぎめしていた。それによって受ける、相手の気持を汲むことを知らなかった。押さば押せ、引かば引けの呼吸を考えず、愛情を一方的に押しつけていたようだ。

「つべこべ理屈を言う女房は嫌いだ。お義姉<sup>ねえ</sup>さんのように、黙って涙をこらえているような女が好きだ。」

「あらお義姉さまは、黙って涙をこらえていらしたからこそ、私と同じ年なのに、半身不随のようにおなりになったじゃありませんか。つべこべ言ったって、びんびんしていればこそ、子供のことも家のことも任せっきりで、安心して自分のしたいことに集中して活動できるんでしょう。」

私は負けずに言いかえした。

口では進歩的なことを言っているけど、家庭という城郭に入ると、やはり封建的な亭主関白でしかない。私の言っていることが、道理にあっていることがわかっていても、年輩の男の人というものは、無抵抗で従順な女房を求めるようだ。一朝ことあれば、健康で多少つべこべいう女房の方が、後顧の憂いもなく頼もしいだろうにと、私は思うのだけれど、これも九州という封建色の強い土地で、さらに封建的な環境の中で育ったためだろうか。

夫は九州の地方財閥の息子として、思い通りにならないものはなかった。

写真をやりたいといえば、高価な写真機が何の心配もなく手に入る。暗室もつくられる。馬に乗りたいと思えば、馬と馬丁がそろう。鳥を飼いたいと言えば、結構人間でも住めそうな、広い小鳥小屋が建てられる。打ち出の小槌か、開けゴマ……まるでお伽噺のようだ。

昭和十二年に結婚して、はじめて九州の夫の生家へ行って驚いた。部屋の数はいくつか、はつきり覚えていないが、旅館のように番号がついていた。迷路のような中廊下で、お風呂へ入った後、部屋がわからなくなって、困ったことがあった。

「小食堂」は、満十五才以下の子供たちの食堂である。十六才以上にならないと大人の食堂には加えてもらえない。遊戯室という部屋で、小さい子供たちは遊ぶことになっている。もっとも子供だけでも十五人兄弟という超大家族だから、これくらいなくては、住めないこともあったろうが、それにしてもあんなに広過ぎたら、手間もかかるし、第一無駄だろうにと、よいな心配をしたものだ。

あたたかい人の情というものがあることを知らされずに育てられたことは、本人のせいではないかも知れないが、何か不幸なことに、私には思われる。

私たちが知り合ったのは、ドイツ語の先生のところだった。グライル先生は、当時芝の清正公の庫裡に、一人住まいしていた。

音楽学校の予科へ、入学した年の春の一日、私は母に連れられて、入門の挨拶にいった。グライル先生は、ちょうど居合わせた、一人の学生を紹介した。そのころ、夫はピアノを習っていたので、よく音楽会へも行ったものだった。ドイツ語の先輩後輩のつきあいから、私たちの

交際は、二年ぐらいたって紆余曲折を経て婚約となり、やがて結婚にまで発展していった。

私の実家も九州だが、財閥でもなければ、大地主でもない。平家の末裔として、進歩的な君主島津公をいただく、大分県鶴崎の藩のお船手であった。つまり海軍で、とくに九州一円でも、鶴崎のお船手は名門で、各藩の殿様の東上の時や、参勤交替の時には、陸路ここに集って、鶴崎から船で海路都に上ったほど、由緒あるものだったという。

父は、男ばかりの八人兄弟の末弟として、商船学校を出ると、若くしてイギリスに留学し、続いて欧州航路のキャプテンとなった。抱擁力の大きい、視野の広い、心の豊かな人だった。

母は、明治中期、加賀百万石の御殿医の娘として、封建社会に育ちながら、これに抵抗を感じて、単身上京、明治女学校に学び、通訳としてアメリカ航路を往復していた、熱心なクリスチャンであった。明治・大正へかけての、女性解放の先覚者として有名な、矢島かじ子先生や守屋東先生のひびに、ちょこんとのっている私の幼い日の写真がある。

こうした両親の血を受けて、私は大らかに育てられていった。損得は別として、屈託なく、思っていることが自由に言えるのも、こうした環境に育ったせいではないかと思っている。

さらに、私の育った大正時代は、ヨーロッパ文化の華が絢爛と咲きほこった、もっともよき時代であった。現代のような、単なる物質文化だけでなく、欧州文化の基調をなした、思想を伴ったものだった。

父が欧州航路のキャプテンから、中村是公さんの満鉄総裁時代、大連の海務局長を経て満鉄で活躍した、もっとも輝かしい時代を、私は知らない。母の思い出話にきくだけだったが、いつとはなしに、人間にとって一番大切な、バックボーンのようなものを、知らず知らずの間に私は両親から与えられていたようだ。

どちらがよいとか、どちらが悪いとかいうことではなく、何一つ不自由のない世界にとり囲まれて育った夫と、物質的にはとびぬけて恵まれなくても、精神的なものを尊いものと教えられてきた私の、まるで正反対の環境の相違が、やがて私たち夫婦の溝を次第に深めていったようにも思われる。

几帳面な夫とルーズな私、合理的な計画性をもった夫とムード派の私、神経質な夫と底抜けに楽天家の私、氷のように冷静な夫と火の玉のような私、観念的な理論家の夫と体験による行動家の私、たしかにこうならべてみると、性格は正反対のようだ。

「コップの拭き方がきたない。」

とよく言われたものだ。なめるように光ったコップ。ガラス窓はいつもピカピカしていないと気になり、洗面所に髪の毛がひとすじあってもたまらない夫は、六人のチビを育てる戦争のようなあけくれの中では、そんなことは大事の前の小事と、後まわしにする私がたまらなかつ

たことだろう。私だってピカピカの方が好きにきまっているが、限られた時間と能力では、さばききれないこともある。あの騒ぎの中で、なおかつガラスを磨いていたら、私の体は今日までもたなかったように思われる。しかし根本的な違いは、欠点をなおしてやろうとする善意からとはいえ、欠点ばかりを目につける夫と、相手の欠点には目をつぶって長所だけを見ていうとする私、この二人の考え方のくい違いがもたらしたものが大きかったように思われる。

ひところ、夫は趣味で軍鶏を飼っていた。愛好者が集まって、蹴合いをさせてない方——つまり負けた方は、その場で命を断って、食用に供される。

「自分のうちで飼っていた鶏だけは、お料理して食べることは、とても私にはできませんから……。」

「それじゃ僕がする。」

夫は器用に軍鶏を料理した。

唐丸籠から蹴合場に放たれた二羽の軍鶏は、命のある限り死斗をつくす。死んでも鳴き声をたてないのが、根性のある軍鶏とされていた。

鋭い嘴と、鋭利な刃物のような蹴爪で、蹴合っている軍鶏の首すじや顔面から、血がぼたりぼたりと流れ出す。私は正視にたえなくなって、蹴合わせている場所から一番遠い部屋の片隅に逃れて、断末魔の悲鳴にも似たその声を聞くまいと、ほかのものに気を紛らすのだった。



「可哀想でとつても見てもらえないわ。」

「冗談じゃないよ。軍鶏て鶏は、斗争のために生まれて来たんだ。それが本能なんだよ。たかわさなければ、軍鶏の生きている意味はないんだ。」

しかし理屈でなく、私は協力し共に楽しむことが出来なかった。私の神経はそれを受け付けなかったのだ。

こんなこともあった。まだ長男が生まれて間もないころのことだった。本当の軍鶏好きは、優秀な系統の卵を買って、これを自分の家の白色レグホンか、ロックホーンにだかせて孵化させ、それをしこんで優秀な軍鶏を作り出すのが、最上の楽しみらしい。

うちで孵化した一羽の軍鶏のヒヨコを、夫は毎日毎日仕込んでいた。ある日、玄関脇で、ヒヨコの軍鶏が、白レグをしきりに追いかけて蹴っているのをみつけた。私はあわてて玄関の長い靴べらをとると、ヒヨコ軍鶏のお尻をたたいて、白レグを逃してやった。

「亭主の趣味を、邪魔するとは何ごとだっ！」

珍しい夫の怒声がおこった。私は逃げ場を失って、隅っこに追いつめられてすくんでいる白レグを、見殺しにできなかったのだ。私は、白レグを助けたことで、何かとてもいいことをしたように思っていたから、夫の怒りの意味がのみこめなかった。

「だって白レグがかわいそうじゃないの。」